大空（生徒・保護者向け）５１号

宮崎県立宮崎西高校・宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校　校長通信

令和3年11月5日（金）

マニュアルと臨機応変―津波防災の日、避難訓練―

□本日の概要

○本日は新たな避難経路の訓練を行った。津波に限らず、防災への危機意識を持ち続けたい。
○マニュアルは大切であるが不断の見直しが必要であり、マニュアルに頼らない臨機応変の対応も必要である。
○大川小の悲劇は、マニュアルを超えた事態を想定できなかったことに一因がある。マニュアルを超えた判断は一人では難しく、正しい情報や、お互いが協力して助け合う関係性が必要である。
○宮崎西高校の防災意識や行動力が、地域の人々の避難を促すような集団であって欲しい。
○本日のＮＦＣ　行動力　協働力　主体性

□津波防災の日

本日は「津波防災の日」です。これは１８５４年（嘉永７年）の安政南海地震（Ｍ８．４）で和歌山県を津波が襲った際に、稲に火を付けて、暗闇の中で逃げ遅れていた人たちを高台に避難させたという「稲むらの火」の逸話にちなんだ日だということです。（内閣府ＨＰより）津波対策についての理解と関心を深めるための日ですが、この機会に、津波に限らず、防災意識全般を高めたいものです。

□新たな避難経路の確認

昨年の避難訓練は、地震の想定のもと、第１グラウンドに全校生徒が集合しました。地震だけを想定した場合、校舎の倒壊や火災がないならば、本来ならば校舎内にとどまるのが安全です。グラウンドに集合していたのは、地震後火災が発生した場合の脱出練習、人員確認の練習、訓練後の講話等のためですが、今回は、大津波発生を想定し、本校校舎より高い大塚台に避難する練習の前段階として、管理棟周辺に集まる訓練を実施することにしました。（今回は大塚台へは避難しません。）ポイントは、全員ができるだけ早く校舎外に脱出し、クラス単位での人員確認が素早くできるかということです。また、特定の昇降口への集中を避けるため、高校２年生は遠回りの避難経路としましたが、本日の訓練の問題点を踏まえ、経路についてはさらに検討したいと思っています。

□訓練の重要性―気仙沼市「伝承館」の教訓―

昨年の訓練では、私は東日本大震災の２つの震災遺構、宮城県気仙沼市の「伝承館」と石巻市にある「大川小学校跡地」を訪問した時の話をしました。（校長通信２５号）が、本日もそのことに触れたいと思います。

宮城県気仙沼市にある震災遺構「伝承館」は、元々は県立向洋高校の旧校舎で、宮崎に例えると宮崎海洋高校に相当します。災害に遭った旧校舎は気仙沼市の港の近くにありました。現在は移転して新築されていますが、被災した旧校舎は震災遺構「伝承館」として保存整備されています。ここでは映像や写真パネルだけでなく、語り部ガイドから直接被災の様子を聞くこともでき、訪れた人に防災の重要性を伝えてくれます。実際の津波の破壊のすさまじさ、これはリモートや写真で伝えることはできません。皆さんも、一度、訪問して自分の目で確認して欲しいと思います。海辺に近かった向洋高校を襲った津波は、校舎４階の高さにまで達したそうで、３階付近に折り重なった車や、流されてきた鉄筋の冷凍工場が４階の壁に激突した跡などが残っています。

大切なことは、このような危険な場所にありながら、当時、学校に残っていた教職員と生徒は屋上に避難し全員無事であったことです。この理由について、同校の職員がまとめたレポートにはこう記してありました。

①校舎が海に近いため職員生徒とも普段から危機意識が強かったこと
②１年前にチリ地震がありその経験が訓練になっていたこと
③ある程度のマニュアルを守りながらも、職員や生徒が臨機応変に判断したこと

□本校の課題

この教訓は、本校も参考にする必要があると思います。まず、津波に関していえば、本校はハザードマップでは比較的安全な場所にありますが、このことが逆に津波に対する危機意識を鈍感にする懸念があります。本県でも、海辺の学校は避難訓練が徹底しています。本校も、今までの台風や豪雨で、校舎の破損、停電、断水、周辺地区の浸水などを経験しており、津波に限らず危機意識を敏感にする必要があります。また、本県は南海トラフ地震の発生可能性を指摘されながら、幸いなことに、ここ数年は本校周辺では深刻な被害をもたらす災害が発生していないため、私たちの危機感が薄れがちです。

③も大切な教訓です。マニュアルにない想定外の事態が起きるのが災害ですが、だからといってマニ

ュアルを作ることや、本日のような「避難訓練」が意味がないという訳ではありません。大勢の人が、素早くどこかに集まったり、安否を確認したりするのは、実は簡単にはできません。ところが、学校は、マニュアルに即し、日常的に様々な集団行動を繰り返しています。毎朝のＳＨＲは健康観察マニュアルに即して行われています。耕心（清掃）にもマニュアルがあります。特別教室で授業を受けるために教室を移動するのも、体育のために短時間で更衣を済ませ集まることも、いわば、集団訓練の連続で、大人がいきなり同じ事をやると、もっと時間がかかるでしょう。

問題なのは、学校はマニュアルが浸透している集団であるため、マニュアルがなかったり、マニュアルが不十分だったりすると混乱する弊害があることです。

まず、マニュアルは、不断の見直し、ブラッシュアップが必要です。これは大変面倒な作業ですが、マニュアルは科学的知見や社会の変化にあわせて改訂し続ける必要があります。どういう情報に基づいてマニュアルが作られているのか、その情報は最新のものか、マニュアルの内容が正しいのか、常に批判的に検討し続ける視点が必要です。そして、いざというときには、これは学校に限った話ではありませんが、臨機応変の判断が必要になります。ここが一番難しいところです。

そう考えると、向洋高校における「ある程度のマニュアルを守りながら、臨機応変の対応した」という記述は、実は大変難しいことをやってのけた、すばらしい対応だったということが分かると思います。これが実践できたのも、常に危機意識を持ちながら、訓練を徹底していたという土台があってのものだと思います。

□大川小の悲劇の教訓

石巻市大川小学校は津波に襲われ、校庭に避難した７８名中７４人の児童と、校内にいた１１名の職員中１０人が死亡するという大惨事になりました。これは、市と県の責任が最高裁まで争われ、市と県に震災前の防災体制に不備があったとして、市と県に約１４億３６００万円の損害賠償が命じられました。当時の津波浸水予想（ハザードマップ）では、大川小学校は津波の圏外で、昔から津波が来たことがない場所として避難所に指定されていました。大川小学校は北上川の河口から約４キロ離れています。河口から４キロというと、宮崎では宮崎市役所付近になり、宮崎の小学校に例えると、宮崎小や大淀小学校などが該当します。また、北上川は川幅が広く、大川小学校付近で５５０ｍもあります。大淀川の橘橋付近の川幅が３３０ｍくらいですので、かなり幅の広い川で、津波が河川を遡上してくるという意識があまりなかったのかもしれません。しかし、実際は北上川では何と４９キロも津波が遡上し、１２キロ地点まで被害が及んだそうです。

大川小学校は円形のモダンな作りの小学校です。壁は破壊され内部がむき出しになった状態で、津波の激しさを物語っています。子供達の壁画が残っており、「未来を拓く」という文字を見たときは、私は胸をかきむしられるような思いに駆られました。

大川小学校には裏山があり、津波到達地点に印がつけられていました。この山に登っていれば助かっただろうと、大川小を訪れた人は誰もが思うことでしょう。しかし、実際は職員は生徒を川に近い三角地帯に移動させ、途中で津波に巻き込まれてしまいました。

なぜ裏山に登ろうとしなかったのでしょうか。当時の裏山には倒木や雪があり、児童を危険な場所に向かわせることにはためらいがあったのではないかという分析もありました。しかし、もし津波が来ると分かっていれば、どんなことをしてもよじ登ったことでしょう。職員の判断を誤らせたのは、当時の大川小学校に、今起きている津波についての正確な情報が伝わっていなかったこと、さらに、「ここには津波は来ない、安全だ」という思い込みがあったことではないでしょうか。

マニュアル通りでない事態が発生したとき、どう判断するのか。想定外のことを想定することができるのか。大川小を訪問して以来、私はずっと、「自分が大川小の校長だったら、あの山に登れと子供たちに指示できただろうか」と自問自答し続けています。

□マニュアルを超えた行動

マニュアルの課題を踏まえながら、マニュアルを活用できるようになること、そして、場合によっては、マニュアルに囚われず、臨機応援に判断できるようになること、これは、防災に限らず、私たちの誰もが突きつけられている課題です。

マニュアルを超える判断を、たった一人で下すのはかなり難しいことです。防災には、公助の他、自助、共助という考えた方があります。地方自治体や学校が準備する施設やマニュアル、情報が公助なら、各家庭での備蓄や連絡手段の確認は自助です。そして、マニュアルにない判断を下すためには、共助、つまり地域やその場所にいる人々が情報を共有し、お互いが助け合おうとする関係性が構築されているということが大切ではないでしょうか。

大川小に対し、岩手県釜石市では、小中学生が率先して逃げて助かり、「釜石の奇跡」と呼ばれています。釜石市鵜住居（うのすまい）地区では、釜石東中学校の生徒が、隣接する小学校の生徒の避難を促し、指定されていた避難場所にとどまらず、さらに高台を目指したために、誰も亡くならず助かったのでした。中学生が全力で逃げる姿は、地元の人の避難を促すことにつながったそうです。

宮崎西高校の防災意識や行動力が、地域の人々の避難を促すような集団であって欲しいと思っています。